HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	現代日本語交感発話の社会語用論的研究［全文の要約］
Author(s)	肖, 潔
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15525号
Issue Date	2023-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/89368
Type	doctoral thesis
File Information	Jie_Xiao_summary.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　肖　潔

学位論文題名
現代日本語交感発話の社会語用論的研究

本論文は、社会語用論的観点から現代日本語の標準語における交感発話の特徴を解明することを目的とする。

「交感発話」は、イギリスの人類学者マリノフスキーの造語―‘phatic communion’から発展した用語である。‘phatic communion’は、直訳すると、「交感的な霊的交流」という意味になるが、より具体的には、「単なる言葉を交わすことによって仲間の絆が作り出されるというような種類の発話」‘a type of speech in which ties of union are created by a mere exchange of words’（Malinowski,1923、Firth,1935）である。そのような種類の言葉がもっている作用は「交感機能」と呼ばれ、交感機能を強く持っているものの典型的な例はあいさつである（Firth,1935、加藤 2004）。この行為の表現形式は、必ずしもまとまった言語形式とは限らない。言語を用いずに人間の表情、身振りのみで表すこともある。そして、あいさつの言語表現は交感機能をもつ典型的な交感発話と考えられる。

これまでの研究には、人類学の観点から英米文化社会における交感の社交的作用を論じたもの（Laver,1975）や、社会学の観点から交感の 1 つの現象（言葉を重ね合わせること）における話者の参加構造と会話の組織化を論じたもの（串田 2006）がある。また、言語学的観点からの研究には、あいさつ（甲斐 1984、鈴木 1975 ほか）や、あいづち等の協働的会話（水谷 1993）、交感の非言語的特徴（笑い、ジェスチャー）（井出 2020 ほか）、あるいは会話形式（くり返し、同時発話など）と会話のプロセス（植野 2016、難波 2020 ほか）に注目した研究が散見されている。だが、交感発話本来の言語的特徴に関心をもつ研究は少ない。交感発話は情報内容の伝達には特に役割を果たさないものの、対人距離の調整作用においては重点的に働いている。対人関係の調整は人間のコミュニケーションにおいて避けられない課題である。ゆえに、発話における交感機能の働き方を解明することが重要になってくる。

あいさつに関する研究は今日にいたるまで少なくないが、それらが扱っているものは phatic communion の一部にすぎないと言える。この他、共話とその関連現象および会話の運び方に関する研究もいくつか見られる。これらの研究は phatic communion と関わっているところがあるが、これらを通して phatic communion の全体像を見通すことは難しい。

本論文は、主に現代日本語の標準語を対象として考察する。『日本語日常会話コーパス』（小磯ほか 2022）や現代テレビドラマに現れるデータを用いて質的研究を行う。交感発話は言語的特徴をもつほかに、社会文化に帰属する要素もあるため、言語学のみならず社会学の理論も応用して考察したいと考える。言語学の面では、主として社会語用論及び統語語用論の観点から考察する。また、社会学からは会話分析の手法も取り入れ、会話構造の視点からも分析していく。

本論文では、日常会話を中心に調査するが、場合によっては書き言葉と独話（学会講演・講演など）の話し言葉も補足的な考察対象にするところもある。日常会話については、主として『日本語日常会話コーパス』モニター公開版、完成版（小磯ほか 2020、2022。以下、CEJC）を使用する。CEJC では、日常場面における自然会話（男性・女性、10 歳～70 歳までを含める）を録画した映像 100 時間分を収録しているため、本コーパスを中心に検索する。そのほか、『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2018 年版』（宇佐美 2018、以下 BTSJ）も部分的に参考に使用する。また、書き言葉と独話の話し言葉については、コーパス検索アプリケーションの「中納言」を使い、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下、BCCWJ。中納言バージョン 2.4.5。データバージョン 2021.03）と『日本語話し言葉コーパス』（以下、CSJ。中納言 2.4.2。データバ

ージョン 2018.01）で検索する。また、データを具体的に調べる必要があるときは、CEJC はドライブ版（Version1.0、2022 年 3 月）、BCCWJ は DVD 版（Version1.1）、CSJ は USB 版（2004、Eighth printing 2021 as KOTONOHA-1）を使用する。

本論文は、5 つの部分から成る。第I部は、問題提起および交感発話に関する基礎的な考察である。第II部は、あいさつ（第 3 章）、交感発話の枠組み（第 4 章）、慣用表現におけるタ形の使用制約（第 5 章）、慣用表現におけるスタイルの変化（第 6 章）、「ございます」というスタイルにみられる構文化と語用論化（第 7 章）、付加型デスの語用論的考察（第 8 章）、談話標識による拡張的交感機能―「なんか」を一例に―（第 9 章）、発話の同調現象からみた交感機能（第 10 章）という順で論を進める。第III部は、初対面時の会話の開始部における紋切り型のあいさつ（第 11 章）、初対面時の会話の開始部における 3 タイプの交感発話（第 12 章）、初対面時の会話の終結部における 3 タイプの交感発話（第 13 章）である。第IV部は、知人関係の会話の開始部における交感発話（第 14 章）、知人関係の会話の終結部における交感発話（第 15 章）、雑談にみられる交感発話の特徴（第 16 章）である。第V部は、全体のまとめと今後の課題である。

具体的には、交感とは何なのかという点について、予備的議論を行ったうえで、交感発話に現れる表現形式に対して統語的・語用論的な考察をした。さらに、交感発話が実際に会話の中に置かれた場合、どのように運用、機能しているのかという点について、会話分析の観点も取り入れながら議論を展開した。

交感発話は、話者同士の会話の経路を営むものであり、あいさつが典型的な例として取り上げられている。交感発話を見極めるには、典型的な例における特質を把握するのが肝要である。従来のあいさつに関する研究には多種多様なものがみられるが、主として話し手の視点から一方的に発信した言葉を論じている。本論文では、交感機能の観点から「話者同士の相互作用」に着目した分析を提唱した。くわえて、交感発話には、あいさつのほかにも雑談などの交感的言語現象があるが、それらをどのように扱えばいいのかという問題提起を行った。そして、第 2 章で基礎的な考察を行い、第 3 章、第 4 章を含め、次のような 3 点を中心に検討を行った。

[1] 交感発話の捉え方。
[2] 交感発話の典型的な表現であるあいさつは、交感機能の観点のもとで、どのようにとらえられるのか。
[3] 交感発話の分類案。

まず、[1]について述べる。[1]は予備的議論である（第 2 章）。交感発話は、メッセージ性のあるもので、一方的に発信するのではなく、双方向的に感情を共有している。言い換えれば、論理のロゴスより、感情のパトスを重視する特徴をもっている。あいさつの決まり文句が例として挙げられる。だが、双方向的に感情を共有する点からみれば、広義の交感発話は、会話の開始部、終結部において、会話のチャンネルを開始したり、打ち切ったりするだけでなく、会話の維持や引き延ばし、会話の山場にも現れると考えられる。くわえて、一部の交感機能を強める言語要素もあるとみられる。これらの点を考察対象に入れたことが、あいさつという狭義の交感発話にだけ着目する従来の研究とは異なっている。

次に、[2]について述べる。第II部では、交感発話と交感機能の考察を行った。典型的な交感発話を解明するために、あいさつを最初の考察対象とした。あいさつとは何なのかという点について、あいさつが存在する「条件」「目的」「形式」「機能」という 4 つの側面から分析した。

あいさつ表現には、社交性がある、情報性が低い、目的性が弱いという 3 つの特徴がある。ここでの目的性とは、特定の課題を解決する、もしくは発話行為の意図作用が明確になっているということを指す。つまり、あいさつとは、単なる対象話者との感情的な交流のために、当たり障りのない話をすることなのである。上記の分析を踏まえ、あいさつとあいさつ表現の定義を下記のように定めた。あいさつとは、「同一の共同体（community）にいる人または共同体を設定しようとしている人が、情報の伝達を目的にせず、親和的な仲間意識を形成、維持するために、定型的な表現や決まった仕種を用いて行う、社交的な行為」である。そして、あいさつ表現とは、「あいさつをするときに用いられる言葉」である。

あいさつ表現からみれば、典型的な交感発話は、「社交性がある、情報性が低い、目的性が弱い」という特徴をもっている。だが、あいさつと関連している「感謝」「謝罪」などの言語現象には、

発話行為の意図作用があるという「目的性が強い」ものも存在している。このような言語現象は、従来の研究ではともにあいさつとして扱われているが（甲斐 1984 ほか)、本論文では、あいさつとは異なる発話内力を強くもつ表現として扱った。Austin（1962)、Searle（1969）の伝統的な言語行為論では、あいさつも発話行為として扱われているが、あいさつは礼儀正しいということが認知される以外、いかなる状態ないし作用も聞き手の中に生じさせたり、誘発させたりすることを意図していないと述べている（Searle,1969＝1986:81)。よって、あいさつは目的性が弱いと認識できるが、対人関係面における作用については、検討する余地がある。本論文では、あいさつを交感的交流に役立つ機能を中心に果たすものとして解釈した。そして、感謝、謝罪、祝福のような表現は、聞き手に話し手の感情を表出する機能をもつほかに、相手との交感的交流も背後に働いていると考えた。

このように、感謝、謝罪、祝福のような表現は、従来のあいさつ論ではあいさつの一種として扱われているが、典型的なあいさつとは異なる特徴をもっているため、第 3 章では、「あいさつ表現」と「準あいさつ表現」の 2 つに分類した。

次に、[3]について述べる。上記の基準に基づいて、第 5 章では、「典型的交感発話」「準交感発話」「疑似交感発話」という 3 つのタイプに大別した。先行研究では、交感とは逆に、話者同士相互の親和性を壊すような卑罵語が「反交感発話」として挙げられている。さらに、交感発話の性質として、「双方向的」「疑似双方向的」「一方向的」という 3 つの種類も相応的に提示した。

しかしながら、「ありがとうございます」は、感謝の行為を表示するとき、「ありがとうございます」と「ありがとうございました」とのようにテンス分化することはある。だが、「ありがとうございます」を、単なる交感的交流のために用いるときは、タ形は用いられないようになる。そして、「おはようございます」「こんにちは」のような典型的交感発話にはタ形がみられない。このような現象に対して、交感発話は形態上どのような特徴があり、それぞれどのような機能を持っているのかという点を明らかにするために、後続の第 5 章、第 6 章、第 7 章、第 8 章において述べた。主として、以下のような問題点を解明するためのものである。

[4] 交感発話慣用表現のテンスに着目し、タ形と非タ形の使用区分、機能の働き方はどのようになっているのか。

[5] 交感発話慣用表現のスタイルに着目し、構文化したものと新しく生じたもの、それぞれどのように形成され、変化しているのか。そして、どのような特徴がとらえられるのか。

[4]は、主に第 5 章において論じた。慣用表現において、テンス分化できるものとできないものがある。テンス分化できない表現は、①述部がないもの、②命令形に由来するもの、③述部は残っているが、慣習化しかつ行為の予告性をもつものという 3 種類があることを明確にした。一方、テンス分化できる表現は、①場面制約が強いもの、②場面制約が弱いものという 2 種類がある。そのうち、場面制約の強いものは、〈事前〉・〈事後〉によって非タ形・タ形が使い分けられる。場面制約の弱いものは、〈事後〉においては非タ形・タ形の両方が使用できる。さらに、テンス分化できる表現には、例外もある。つまり、場面制約の強いものは、制約が弱くなるとき、〈事後〉で非タ形・タ形の両方を用いる場合がある。一方、場面制約の弱いものは、限定した場面において、〈事前〉〈事後〉という場面制約が強くなる場合もある。さらに、Jakobson（1960）の言語伝達行動と「機能負担量」(Martinet,1966）の理論をもとに、タ形と非タ形の使用をそれぞれ解釈した。

また、タ形による「完了・終了」というメタメッセージが生じ、メインのメッセージとメタメッセージとが両方存在する場合がある。だが、「おはようございます」のような場合は、タ形によるメタメッセージがないため、標準語では「おはようございました」が存在しないということについても論じた。このように、「ありがとうございます」「お疲れ様です」は、非タ形の場合、過去の行為に関する事象叙述性がある程度弱められ、相手との交感機能が強く顕示される。とりわけ、「感謝」「慰労」は、話し手から聞き手に対して一方向的に感情表出することが通常である。だが、あいさつのように双方向的に用いられる場合は、相互に感謝する、働きをねぎらうという目的の行為をするというより、話者同士が単なる交感的交流を行っているだけである。そのほか、タ形と非タ形の使用区分は、ポライトネスとリモートネスにも関係しているところがある。

次に、[5]について述べる。交感発話のスタイルについて、主に「です」と「ございます」を取り上げて考察した。慣用表現は、引用され、名詞化するにつれて、①＋です、②＋さま（さん・

ちゃん)、③＋さま（さん・ちゃん）＋です（っす)、④＋さま＋でございます、というようなスタイル変化がみられる（第 6 章)。特に、このうちの付加型デスについては、「こんにちはです」のような「新しいデス文」をどのようにとらえたらよいのかが問題になる。そこで、第 8 章では、メタ的語用論の観点から「です」に関する拡張的用法を明らかにした。具体的には、「どうもです」「すみませんです」「こんにちはです（こんにちはっす)」「はじめましてです」という 4 つの事例を取り上げて分析を行った。そして、「どうも」「すみません」「こんにちは」「はじめまして」という慣用表現の外側に「です」を付加し、一種の「引用」として扱い、直接相手を行為の受け手とするのではなく、会話の聞き役として接し、間接的に謝意を表し受け手に直接触れないように敬意を払っているのであるという見方を提示した。「慣用表現＋デス」を「α＋デス」とのように表示すれば、「今は α と言うべき場面です」というメタ言語として解釈できる。「です」は丁寧さをもっているが、このようなメタ言語は逸脱的な話法であり、一種の俗用である。くだけた場面において用いられるが、敬意は失われていない。

また、「ございます」については、「おはようございます」は、「おはようござる」という普通体がないという問題点に着目した。「第 7 章」において、「ございます」と「おはようございます」は、「構文化」という統語的特徴と「語用論化」という語用論的特徴をもっていると明らかにした。「ございます」は、文法化の完成度が高いものとして、「おはやい」との統合による「おはようございます」の構文化もとらえられる。そのほか、「おはよう」も構文化、脱文法化が進んでいる。さらに、語用論的観点からみれば、「ございます」は、「ござる」という「上下の関係」から「距離の関係」を意識した丁寧語に変化した。だが、「おはようございます」の構文化に伴い、従来の「相手の早起きや勤勉を賞賛する言葉」から、儀礼性のある形式的なあいさつになった。「おはようございます」も「聞き手を意識した、会話を開始するような交感機能」を生じるようになった。本論文では、このような現象を「語用論化」として主張した。

上記は、交感発話の慣用表現の形態に関する議論である。だが、会話において、開始部と終結部であいさつなどの慣用表現をもって交感機能を確保するほかに、会話中において、ある言語要素を通して交感機能を補充するものもある。具体的にいえば、会話の開始部にあいさつをもって交感機能を働かせ、友好的に会話を継続する状況が生まれる。そのあと、会話が進む中に、友好的な状況が薄くなったり、雰囲気が緊張になったりする場合がある。その際、談話標識、呼びかけ語などの言語要素をもって、会話の途中で示すことによって、和らいだ雰囲気で相手が会話に加わりやすい状況を作るのである。このように、会話が円滑に進めることができるため、拡張的な交感機能として解釈した。本論文では、談話標識の「なんか」を一例に、相手に強い姿勢で臨んでいない、交感機能が弱まったところで小さく強め、交感機能が落ちていないように会話を継続させていくような現象を考察した。「なんか」のような談話標識のほかに、呼びかけ語、言葉を重ねて応答するなどの戦略を用い、会話中のところどころにおいて会話の調子を調整し、交感機能を補充する現象も多々ある。このようなものは、慣用表現のように発話として扱えないが、言語要素として交感機能を強めているのである。さて、ここまでは、慣用表現を中心に論じたが、単独の発話ではない場合、談話間において交感機能を果たす発話はどのような様相を呈しているのだろうか。この 2 点を明らかにするために、第 9 章、第 10 章で考察を行った。

[6] 談話標識は、交感発話の言語要素として、どのように働いているのか。会話進行中に「調整」という機能をもつ「なんか」を例として取り上げて考察する。

[7] 単独の発話は、交感発話としては判断できないが、談話間において交感機能を生じている。それを明らかにするために、交感機能の重要な特徴である「共感」をもとに、発話の同調現象から交感機能をとらえる。

[4]、[5]は、交感発話の慣用表現に着目しているのに対し、[6]、[7]は、交感機能に着目した議論である。まず、[6]について述べていく。談話標識は、「談話上の目印」として、情報に関するメタレベルの情報を提示している。そして、「なんか」が談話標識として会話の雰囲気を和らげる機能をもっていることを明らかにした。「第 9 章」では、文頭・文中・文末における「なんか」を考察対象とし、機能の働き方と会話を促進する点から「拡張的交感機能」をとらえた。要するに、「相手との心理的接触に配慮しながら情報伝達をする」ものである。「なんか」は、言語要素として、そのような働きをしている。したがって、本来交感機能を中心に果たすものとは対照的に、「会話

進行中の『調整』のように、会話のメタレベルにおいて交感機能を果たすもの」を拡張的交感機能として解釈した。本章は、〈話し手自身〉と〈聞き手との関与〉という視点から、文頭・文中はフィラー、文末は言いさしとして用いられるときの働き方を明確にした。「なんか」は、下記のまとめに記したように、聞き手との心理的接触を図りながら、会話を促進するうえで調節の役割を担っている。このように、コミュニケーションの環境を作る点において、交感機能と共通しているため、拡張的交感機能として解釈した。

次に、[7]について述べていく。第 10 章では「同調」現象を取り上げたが、会話分析における、隣接ペアの第 2 部分が、第 1 部分が達成しようとする行為連鎖の実現に促進するという見方を参考にした。例えば、「誘い」—「受諾」という行為連鎖があり、「誘い」という第 1 部分に対して、「受諾」という第 2 部分の生起は「同調」である。本論文で扱う同調現象には、話者同士が発話形式を通じて共感を形成することから、対象話者への直接的な反論を避け、意見上の一致を求めることまで、幅広く含まれている。このような「同調」は、話者同士の不一致を緩和、解消し、同感を求め、最終的に会話を促進させるため、話者同士の会話のチャンネルを営むという交感機能を働かせているととらえられる。そこで、「発話の重なり」、「重複応答」、「極性を反転させる言い方」、「タイプ非一致型応答」という 4 つのタイプの発話現象を取り上げ、「前景・背景」という概念をもって交感機能を解釈した。「発話の重なり」と「重複応答」は、発話形式から判断できるが、「極性を反転させる言い方」と「タイプ非一致型応答」とは、発話内容によって判断した。前者は、交感機能を前景化しているのに対して、後者は、論理面において情報のやり取りをする事象叙述機能が前景化し、交感機能がその背後に働いているのであるとした。

交感発話と交感機能の形態から実質までに関する分析を終了したあと、第III部、第IV部では実際の会話における運用を考察した。主に以下の問題点をめぐって論じた。

[8] 初対面時の会話の開始部と終結部における交感発話。
[9] 知人関係間の会話の開始部と終結部および雑談に出現した交感発話。

まず、[8]について述べていく。初対面時の交感発話は、第 11 章、第 12 章、第 13 章において論じた。「第 11 章」は、「はじめまして」「すみません」「こんにちは」という 3 つの定型表現を切り口として、初対面時の会話開始部における使用場面、性質、対人関係に関して初歩的な考察を行った。この 3 つの定型表現は、改まり度が高く、正式場面と非正式場面に関わらず、幅広く使用されている。そのうち、「はじめまして」と「こんにちは」は、双方向的に使用されるのに対し、「すみません」は、前置きとして、相手の注意を引き付けるのに一方向的に使用されている。「はじめまして」は、話者同士が自己紹介するとき、「こんにちは」は、話者の一方が受付であるような、制度枠内に役割をもつときなど、場面の設定によって産出された形式的な発話であると考えられる。一方、「すみません」は、相手に頼みがあるときに用いられる表現であり、典型的な交感発話とは異なるところがある。

第 11 章の議論を承け、第 12 章は、定型表現だけではなく、会話開始部における交感発話の全体像をつかみ、「位相」と「動機づけ」の観点から分析を試みた。初対面の会話開始部を 3 つの場面に分けて考察を進めた。①A 場面：実際の会話前に、対象話者に関する情報をある程度有しているが、直接会話をしたことがない場合；②B 場面：会話参加者の役割関係が明確な場合（店員と顧客、医者と患者など）；③C 場面：A と B 以外で、未知の相手と一定時間において自由に会話をする場合。

A 場面では、会話を開始する前に第三者から対象話者に関する情報を得ているが、直接会話を開始するときに「はじめまして」という典型的な交感発話を用いる。このような場面における交感発話の使用は、慣習性があるため、発話の使用は場面によって予測することができる。B 場面は、役割関係が明確な場合で、典型的交感発話と準交感発話という 2 種類の表現が現れる。典型的交感発話は、対象話者に出会う場面によって、規範的、かつ形式的に使用されるとみられる。準交感発話は、話者の一方が対象話者に頼みがあるのをきっかけに会話の経路を開いている。その際に、相手との連結を生じさせるために、「すみません」という謝罪言葉を転用している。C 場面は、それほど多くみられるものではないが、話者同士がある空間に詰め込まれたとき、気まずさを解消するために雑談の形式で会話を開始するといった場合がある。会話は長く持続しないが、共存している場所や対象話者の見かけなどに関して、近接化を示す表現が用いられている。

第 13 章では、初対面時の会話終結部における交感発話について考察した。人間同士の接触は、〈一回性接触〉と〈継続性接触〉があり、話者同士が接触する意欲があるかどうかに基づいて、初対面の人間同士の接触パターンを「意欲あり」と「意欲なし」というように区分した。また、「前景と背景」という概念を用いて、交感発話の機能の働き方と「位相」「動機づけ」についても分析した。

次に、[9]について述べていく。第 14 章、第 15 章では、会話の開始部と終結部をどのように認定すべきのかという点について再検討し、会話分析の観点をもとに詳細な基準を設定した。知人関係間の会話開始部としては、家族（親子・夫婦・姉妹）、恋人、友人、医療関係、仕事関係（同僚）のデータを考察対象としている。そして、相互行為（会話）のタイプは、Schegloff（2004）の「計画された相互行為」と「副産物としての相互行為」という 2 種類の用語を踏襲しているが、両者の概念をそのまま援用せず、前者を「意図的」、後者を「偶然的」とする区分をもとに、各タイプの会話における交感発話の使用状況によって、知人関係の会話開始部を以下の 3 種類に区分した。「疑似計画的相互行為」は、「計画された相互行為」と「副産物としての相互行為」の中間に位置付けられるものである。

一方、終結部については、本題と関連づけているため、「明確な課題解決目的があるもの」と「課題解決目的がないもの（雑談）」という 2 種類の相互行為に分けて考察した。また、「終了準備」には、「正当な理由を宣言する」タイプと「体現する」タイプがあるが、本論文では、前者を「明示的宣言」と「暗示的宣言（推意）」という 2 種類に分けて記述した。後者は、文脈から話者のどちらにもそれ以上話したいことがない場合であると判断している。会話の終了は、話者同士が終了に関する合意を得る必要がある。その際に、会話を穏やかに切り上げるために、交感発話は「正式終了」という終了部門に存在し、知人関係の場合の終了にも 3 種類があることを明らかにした。

家族・恋人などのように心理的距離が近い人間関係の場合、交感機能の働き方は、サービス関係や同僚などのように心理的距離が遠い場合の働き方とは異なっている。前者では、談話間に生じた交感機能（重複応答・共話など）が多くみられる。状況次第で、会話が直接終了する場合もある。それとは対照的に、後者では典型的交感発話（形式的）によって遂行されるものが多くみられる。

また、第 16 章では、雑談を主題とする交感発話について考察している。雑談の本質をとらえるために、特定の課題をもつ会話の対立面から雑談の特徴を見極め、雑談と交感発話の関係を明らかにした。そこで、東京都議会にある雑談を考察対象とした。

雑談は、「話し合いの本題から逸脱した話題で、交感機能をもつ自由な談話」である。雑談度が高ければ高いほど、交感機能が強いと考えられる。そして、聞き手にとって、新情報となる可能性が高いほど、雑談の有効性が高くなり、雑談の度合いも高くなる。よって、雑談は、情報価値が高いわりに、交感機能があるものととらえられる。ただし、雑談は、あいさつに比べると、交感機能が部分的に働いているのである。雑談の種類は、「社交的な場」と「制度的な場」があると示すことができる。

以上、本論文を概観すると、交感発話による対人関係は、以下の 3 種類があると考えられる。第一に、典型的な交感発話、準交感発話にみられた形式的、慣習性のあるものには、伝統的で、かつ品位を保っている丁寧な慣用表現がある。このような慣用表現は、通常「単独の言葉で交感発話」と認定された。このような表現は、初対面時の会話に「改まった」、「規範性」のある交感発話として出現している。対人関係のポライトネス論からみれば、丁寧ではあるが堅苦しいため、距離が「遠隔的」となっている。また、自己紹介のような情報価値が高い雑談の部分も改まり度が高いため、遠隔的な交感発話としてとらえられる。第二に、慣用性をもたないが、発話の同調、「共話」ならびに共感形成した表現から交感機能をとらえるものがある。本論文では、「談話間において交感機能が強く働いているもの」として扱い、相手に近接化を示した疑似交感発話と呼んだ。このような表現は、知人関係の会話で「ぞんざい」「常体」のある交感発話として出現している。対人関係のポライトネス論からみれば、丁寧ではないが親近感があるため、距離が「近接的」となっている。第三に、慣用表現を引用した形で「です」を外付けた新形式のあいさつ言葉である。このような表現は、「丁寧と非丁寧の中間」に位置付けられる。くだけた場面において、丁寧に発話しようとするときに、場面に合わせるほかに、敬意を保つ上で役立っている。このような運用話法は逸脱的なものであり、親しみをもたらしている。そのほか、「なんか」のように、言語要素として発話につけることによって、最終的に雰囲気を緩和し、会話を促進するような、聞き

手に作用する力を調整するものがある。本論文では、これを遠隔的と近接的の中間に調整する機能をもつものとして扱った。このように、語用論的観点から、交感発話においても「遠隔化」「近接化」「遠近調整」という 3 種類の表現があることが明らかになった。

以上のように、本研究は、対人関係の語用論的観点および社会学の「会話分析」という方法論を融合したうえで考察を試み、あいさつをはじめとする交感発話に対する認識を一新できたと考える。